

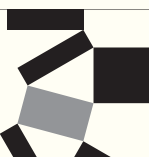
TURN NOTE

TURN とつながったときの言葉
2018

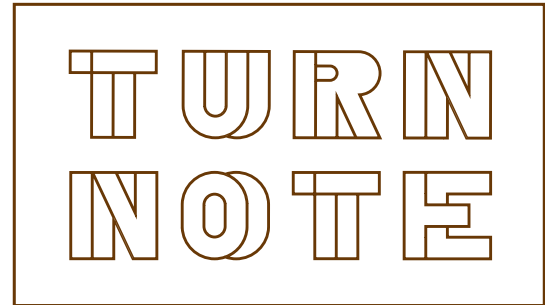
ARTS COUNCIL TOKYO



文化
オリンピック



TokyoTokyo
FESTIVAL



TURN とつながったときの言葉
2018

はじめに

来年の予定を確認するためにカレンダーを眺めていると、「2020年」の数字が目飛び込んできた。2015年に東京でTURNが始まった当初は、5年後をイメージすることは容易ではなかったが、いよいよ「その時」を迎えようとしているのだと、時が否応無しに伝える。

TURNも、4年目を迎えた。

—

本書『TURN NOTE』は、事業成果物と言われる記録冊子の中では珍しい存在だと言えるだろう。写真はこれまでほとんど使用してこず、200-400字程度の文字数で集められた約45の言葉から、この1年の活動を伝えようとしている。

その理由は、言葉に彩られた解釈や説明を先行させずに、「まずは体験すること」を重視してきたTURNというアートプロジェクトにおいて、現場で生まれた対話や身体的反応の咀嚼を、発せられたままの言葉で残す積み重ねが、プロジェクトに取り組む当事者を支え、TURNの形づくりにつながるとの期待を託しているからだ。

—

監修者の日比野克彦は、TURNが始まった当初から「一人一人」という言葉をよく口にしてきた。頻繁に使用していたために、アルゼンチンでTURNを実施した* 際に、現地のコーディネーターが最初に覚えた日本語が「ヒトリヒトリ」だったくら

いである。一人一人がそれぞれに違った魅力を持っていることに気づき、価値として見出すことを「アート」は可能にしてくれる。TURNの実践現場で私たちは、「人と違う」ことが価値となるアートの本質が、多様な背景や習慣を持つ人々の日常に届くことで、これまでは知り得なかった世界に触れ、築けな いと思われてきた関係への新たな可能性をひらく瞬間と出会ってきた。

—

他方、福祉についても考えてみる。

「福祉」（ここでは障害福祉や高齢福祉に限定せず、社会的マイノリティへの支援も含めて広域的に捉える）とは、社会生活を送ることが困難な状況にある人や、既存の社会の枠組みに生きづらさを感じている人の個別のニーズを一つ一つ拾い、支援し、改善に導く仕事である。その人がよりよく生きていくために、家族、地域、社会など、本人が関わりを持つ全ての対象へ幅広く理解を得る働きかけが必要とはなるが、いつだって、出発点も到達点も「個人」にあると言って良い。

私は、文化事業として多様性ある社会の実現を目指すTURNが、福祉とのパートナーシップを組む最大の理由が、この「人に寄り添う」専門性にあると考えている。背景の多様な人同士のコミュニケーションによってTURNを育もうとすると、常に人に寄り添いつづけてきた福祉との連携は、大きな可能性のうねりをもたらしてくれるに違いない。

アートと聞くと、何かを創り出さなくてはならない、あるいは創り出されたものを間違わずに読み取らなくてはならないかの様に捉えられたりもする。だが、ここで言うアートとは、日々の暮らしの中で遭遇する“カタチにならないもの”について観察したり、“カタチになろうと変容を始めるその瞬間”を面白がってみたりすることだ。そうすることで、日常のあらゆる場所がアートを体験する場所となり、あらゆる人がアートの主体となれることを目指している。

現実には、整理や折り合いのつかないことに溢れているが、そうした場面に反応できた瞬間こそ、「TURNした」と言えるのではないだろうか。

このアートプロジェクトは、TURNそのものを探す旅路のようであり、TURN NOTEは、その旅路で体験したことを記録する手帳のようなものとして捉えてきた。

—

しかし、3冊目の発行となる本書を制作するにあたって、そのあり方に変化が訪れた。

言葉の選定過程で、TURNを探すプロセスだけでなく、「すでにTURN(という言葉)がある」から、別の場所で活動している人が集まり、それぞれ独自の取り組みで培った体験が集まっていると感じさせる言葉に多く出会ったのだ。日比野が述べている「つないでいく言葉としてのTURN」がまさに、4年目のTURNを象徴している。

もちろん、体験しているときや、その言葉を発している瞬間は、それがTURNの全体像を眺めたときにどこに位置づくかなど計算することはできない。しかしこうした体験と思考の足跡を辿りながら、私たちは次に歩むべき一歩を探し出している。

TURNをきっかけにして始まった多様な人と人との出会いを通じ、自分たちの力では変わりえないと思っていた「枠」や「時間」の変化が促されたり、現実世界での難しい事柄にも新たな眼差しが注がれ始めたりといった、これまでとは違う反応が起こっていく。そして、それら一つ一つの事柄について思考、思索するという時間が、TURNをより創造的なプロジェクトへと導いてくれることだろう。

本書が、それを支える手引きとなれば幸いである。

—

—

TURNコーディネーター

奥山理子

*「TURN in BIENALSUR」(2017年7月–10月/アルゼンチン、ペルー)

TURNについて

SOCIALLY INCLUSIVE ART PROJECT

T U R N

障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトの総称です。

アーティストが、福祉施設や社会的支援を必要とする人のコミュニティへ赴き、出会いと共働活動を重ねる「TURN交流プログラム」と、TURNの活動が日常的に実践される場を地域につくり出す「TURN LAND」を基本に据え、「TURNミーティング」と「TURNフェス」の開催によって広くその意義を発信しています。

監修：日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授） | プロジェクトディレクター：森 司（アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長） | コーディネーター：奥山理子（アーツカウンシル東京、東京藝術大学特任研究員、みずのき美術館キュレーター） | 主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学

TURNは、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展2014-2015「TURN／ひとがはじめからもっている力陸から海へ」（2014-2015年）をきっかけに生まれ、平成27年度に、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトとして始動した。

TURN 2018

1月 第4回TURNミーティング～年次報告会～開催

ゲストを交え、地域社会への広がりや海外での展開をテーマに、平成29年度のTURNを振り返り、今後の展望について議論した。

2月 各地のTURN LANDでイベント開催

板橋区立小茂根福祉園、気まぐれ八百屋だんだん、クラフト工房 La Mano、ハーモニーなど、福祉施設やコミュニティスペースがアーティストともに、地域にひらかれたTURN LANDのイベント開催。

3月 リサーチプログラム報告会開催（非公開）

さまざまな人の特性を通して、社会で表面化されていないことを探求するアーティストリサーチプログラムの成果報告を実施。

4月 2018（平成30）年度のTURNが始動

新たなアーティストや施設が加わったTURN交流プログラム、2年目のTURN LANDが通年でプログラムを実施。東京藝術大学が主催団体に加わり、連携して国内外のTURNを展開。

5月 第5回TURNミーティング開催

TURNのプロジェクト関係者が集まり、今年度の事業トピックスを共有。

7月 「TURN-LA TOLA」

日本人アーティストがエクアドルの首都キトにあるラ・トラ地域へ赴き、現地のアーティスト、学生、地域住民らとの交流を経てパフォーマンスを実施。

8月 TURNフェス4「日常非常日（ビジョッピジョッピ）」開催

監修者・日比野克彦の造語「日常非常日（ビジョッピジョッピ）」をテーマに、全国各地、海外からゲストが集まり、展示、ステージ、ワークショップ、トーク、ツアーを繰り広げた。

10月 第6回TURNミーティング開催

TURNフェス4振り返るほか、ダイバーシティ社会を見据えた文化施設の人材育成やアクセシビリティの取り組み、スペシャルゲストによるトークを開催。

本書は、「TURN」における以下の資料(2018年1月-12月)をもとに作成しています。

2018年12月31日現在の情報に基づきます。

TURN公式ウェブサイト 「タイムライン」	ウェブサイト上で公開している、TURNの活動日報 https://turn-project.com/timeline
--------------------------	---

文字起こしデータ	●リサーチプログラム報告会 3月5日、アーツカウンシル東京で開催された平成29年度のリサーチプログラム報告会 ●TURNフェス4 8月17-19日、東京都美術館で開催。会期中に実施したトークイベント等のプログラム ●TURNミーティング(第4回-第6回) TURNを共有し、意見交換する開かれた場。第4回は1月28日に東京国立博物館、第5回は5月13日、第6回は10月27日に、共に東京藝術大学にて開催
----------	---

その他	TURNフェス4サポーター(ボランティアスタッフ)を対象にした振り返り会、プロジェクトの進行過程でやり取りされたメールの抜粋、会議中の発言など
-----	---

TURN NOTE

「TURN」という言葉の出現によって、美術というものが世の中に機能しているんだねっていう理解が一般社会の中に広まっていく。そういう重要な言葉、そして動きになっていくのではないかと考えています。

今、アートや福祉の領域でも、いろいろなところでそういう方向に向かっていて、閉ざされたものを開いていこうという動きがあるけれど、それらをつないでいく言葉としても、「TURN」という言葉が機能していくといいなと思っています。

—

日比野克彦（TURN監修者）

TURNミーティング4より

2018年1月28日

私たちは（自閉症の高橋舞さんが、置物やぬいぐるみをカラーテープで巻き付けた塊）を「作品」とは言っていないんです。これは彼女のものであって、でも彼女の何かはわからない。彼女が「売ってください」と言ったら売りますけれども、彼女はそれを作品とも言わないし売ってくれとも言わない。私は、ただひたすら毎日続けていくものであるという、無作為のあの姿にすごくグッとくる。

—

久保田翠

（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長）

TURNフェス4「妹のわりきれなさツアー」より

2018年8月17日

無作為のあの姿

TURNとつながったときの言葉

かなり長く動かない間があり、周囲も困惑しはじめ、助け舟を出そうか迷いつつ、でもぐっところえて見守っていたら、次の間で人差し指がゆっくり動き、思わず周りも「おー!」と響めいた。

（中略）

「待ちましょう。」と話した。待つことで、出来事を見守る周囲がもう一度呼吸をし直し、再度目の前の出来事を新鮮に見つめる眼差しが生まれるのではないだろうか。

—

大西健太郎（ダンサー）

タイムライン「待つ」より

2018年1月17日

待ちましょう

TURNとつながったときの言葉

日本語ができて、経済的な安定があれば、豊かな生活が送れるのか。それだけではない。アートは、希望であると同時に生き方を教えてくれる指針。

人間は人とのつながりがある中で生きている。答えが出ない、成果が出ない、わからないことは全然あっていいこと。わからないことはわからないまま、答えがないものは答えがないまま引き取っていく。普段の教育、仕事では常に成果を求められる。そういう右肩上がりだけでない、個人が持っている違いや弱みが強みになったりする。彼(彼女)らがアートを通してそうした経験をしているのかしていないのかは大きな違いになってくる。

—

海老原周子(一般社団法人kuriya*)

TURNフェス4「SDGs_2030年に向けて～未来の

コミュニティを考える～」より

2018年8月17日

*一般社団法人kuriya: 移民の若者たちを対象に、アートプロジェクトによる人材育成や場づくりを行っている。

障害を持つ人たちと、あ、僕はこうやって一緒にいる、ということがすごく嬉しかった。あ、こうなんだよな、というか。これまでは、ちょっと横に置いておいた問題をちゃんと直視する場にいられることに、すごく僕は満たされたと言いますか。そういう意味では僕は、TURNしちゃったのかなという感じはしますね。あ、そして何よりもこの社会にアーティストという存在として「僕もいていいんだな」と強く肯定された。

—

伊勢克也(アーティスト)

リサーチプログラム報告会より

2018年3月5日

ある（アートプロジェクトの）事業で商店街会長と一緒にだったとき、彼は初めはどうしていいかわからなかったそうです。「好きにしろって言われてもなあ」と。

でも数年経ったとき、その商店街会長さんが自分の言葉として「多様性」や「許容」ということを話すようになった。これからの街のことを話し合うときに、メンバーに女性がいなかったことや、福祉施設の人がいなかったという偏りを指摘するようになった。それが、（アートプロジェクトだけが）関係したことではないだろうけれど、影響があったことは感じられた。

放っておくと人は肩書きとか社会的立場、属性でやり取りしてしまうけれど、そうではないところでコミュニケーションすることもできる。

—

鈴木一郎太（大と小とレフ取締役）

第4回TURNミーティングより

2018年1月28日

アートの役割を考える上で、教育が重要になってくる。

図工のときに美術を「習い」ますよね。

それで、大人になって「美術が苦手」という人がいる。だけど、美術は本来苦手になるものではないと考えているんです。

「アートは苦手だ」と言わせてしまう美術との最初の出会い方が、アートの一部分の役割しか伝えていない。アートはもっといろいろな役割がある。一人ひとりの持つ魅力を発見していく力や、価値を変えていく力がアートにはある。

—

日比野克彦（TURN監修者）

TURNフェス4

「クロージング・トーク：明日に向けて」より

2018年8月19日

「生きてるぞ」

という時間

TURNとつながったときの言葉

どの作品も作るときはものすごく一生懸命に作るんです。別にお金のため、何かのためというのではなく。結構夜遅くまで時間を忘れて、かなり懸命になるんですね。

そのときに集中して作るという感覚が、結構あると思うんです。その真ただ中にいるときは無我夢中だと思うんですが、ちょっと時間が経って振り返ってみると「生きてるぞ」って、その当時はそうだったぞ、と思う。

「思いっきり生きてるぞ」という時間を、制作することで持てるということだと思うんですけど、集中して「生きてるぞ」という時間と「表現」がどう関わるのかな。

—

朝倉景樹（シューレ大学スタッフ）

TURNフェス4「シューレ大学*トーク」より

2018年8月18日

*シューレ大学：東京都新宿区にある、引きこもり、不登校の学生が通い、人や社会とのつながりを模索するオルタナティブ大学。

老後の時間って何かな、って思って。あの世に旅立つといいますか、行くにあたって大切な時間で、自分の人生はなんだったのだろうか、ということ了自己編集している世界なんじゃないかと思って。

—

伊勢克也（アーティスト）

リサーチプログラム報告会より

2018年3月5日

TURNとつながったときの言葉

世界

自己編集して

ノイズの転回

TURNとつながったときの言葉

ジョン・ケージという実験音楽の巨人がノイズだけの「音楽」を発表し、音楽にコペルニクス的転回をもたらす。「転回」以降、ノイズも音楽と同じく包摂のメディアになった。ここエクアドルにおいて、僕らは異邦人—ノイズの一種なわけだけども、そこに転回は訪れるのかしら、とか、そんなことも考えてみる。

—

小野龍一（アーティスト）

タイムライン「ノイズの性質」より

2018年6月18日

今、世の中は便利なんだけど、そうなった瞬間にいろんな物事が固定化している。

（中略）

例えば、授業に出ないっていう素振りをした子は、授業に参加する意思がないとみなしてしまう。本当にそうだったとしたら、（出たくないという）意思の表現はできているとも言い換えられるわけですね。

でも、そうとは見ることができないのが今の世の中。一個の役割の中で（考えてしまう）。「この椅子は座るためにあるので、それ以外のことには使ってはいけません」とか…。幅がないなっていう感覚がある中で、外部からの関わりや役割を、どう内部が受けとめられるようになっていくのか、ちょっと外れたものをどうやって受け入れていくのか。

—

鈴木一郎太（大と小とレフ取締役）

TURNフェス4「街を生きる～教育現場での実践を通して地域に投げかけること～」より

2018年8月18日

意思の表現

TURNとつながった
意思の表現

違う感性

TURNとつながったときの言葉

さまざまな展示が隣り合っている。多様な人が共存している感じ。その中で価値観が違う感性を確かめ合える。接し方も一人ひとり当然変わってくるはずです。

—

田中真理子 (TURNサポーター)

サポーター長・サブ長振り返りより

2018年9月10日

日々の傷つくコミュニケーションみたいなもので、みんな経験あるかもしれないんだけど、私は家族に対してすごくあった。

「家族」って一人ひとりが持っている文化がすごい違う集団だと思う。違うのに一緒に住んで。それを血縁関係があるからわかりあえて当然って考えるのも違うと思うし、「大家族で一家団欒、ほっこり」っていう家族像を持ってない人もいると思うから。そうじゃない、拡張した家族像を持てたら…いろんな人が、なんかわからないけどいるというのが、山山アートセンター*の構想の原点。

—

イシワタマリ (美術家/山山アートセンター代表)

TURNフェス4「よもやまばなし〜移住が創起させたアートセンター構想〜」より

2018年8月18日

*山山アートセンター：京都府北部の山あいを拠点とし、アートを通じてさまざまな人が力を持ち寄ってとにかく生きようとするプロジェクト。

拡張した家族像

TURNとつながったときの言葉

居辛さの懺悔

TURNとつながったときの言葉

話せば話すほど、相手の存在を遠くに感じるような、不思議な感覚を得ました。普段から、コミュニケーションをベースに活動を行っていて、その根本には、「話せば話すほど伝わらない」「話せば話すほど互いによくわからなくなる」「結局コミュニケーションは不可能かもしれない」という思いがあります。でも、それでも伝えたいから、伝えることを試みるという態度を取っていて、今回はまさにそんな矛盾するイメージ通りの感覚を得たと思いました。「実は壁一枚向こうに相手がいる」という構造を、仕掛けた側の自分はよく理解しているはずなのに、話す時間が長くなるほど、相手がどこにいるのかよく分からなくなるという感覚になっていき、そこがとても興味深くもあり、コミュニケーションとはまさにこれだと思う経験を得ました。

—

佐藤悠（アーティスト）

タイムライン「居辛さの懺悔」より

2018年9月7日

異物は通い続けると異物ではなくなる。それが残念…。だからプログラムのところでいろんなことをやる。想定外のことを行う。

—

松本知子（社会福祉士／言語聴覚士）

TURNフェス4「異質なもの同士の出会い〜アーティストと療育現場の相性〜」より

2018年8月17日

異物ではなくなる

TURNとつながったときの言葉

考える前に 動き出すカラダ

TURNとつながったときの言葉

普段服用している薬の副作用で、表情が強ばったり、思ったことや感情を言葉にすることが難しい時がある。活動の一つ〈手の会話〉をしていると、さまざまなかたちで身体の中に流れる波が表情をあらわす。意識がふっと遠のいていく瞬間、眠り始めてしまったような深い沈黙、今いるここが別の場所になって、かと思ったら呼びかけられ戻ってくる瞬間、めくるめく風景が変化する。自分でも意識していないこと、ついそうなってしまった動き、横やりのように舞い込んでくる出来事など、どこからどこまでが自分のことで他人のこと？ちぐはぐで根拠がない、非論理的で方向性のない行為。本人も「何で(そうなった)?」の表情。周りがどっと笑う。活動を正しくやろう、内容を理解して網羅してやろう、やろうやろうと意気込み過ぎても行き詰まる。かといって、ふざけているだけでは、場の空気を食い尽くしてしまう。

—

大西健太郎（ダンサー）

タイムライン「答えにすがらない精神、考える前に動き出すカラダ」より

2018年1月17日

私はどうして撮りたいんだろうってことをやっぱり繰り返し考えましたし、向き合っていくうちにどんどん変わっていくこともありました。相手が変わってくれることよりも、自分が変わらないと関係性っていうのは変わらないんだとか…。撮る時間よりも、活動に参加して病院の皆さんと一緒に過ごす時間も結構多くありました。そこで共有したことは、いろんなところで変容しつつやっていけるのかなって思う。作品を作るときにも、内を見て外を見るようなことは大事にしています。

—

田村尚子（写真家）

TURNフェス4

「精神科病院によるアートの取り組み」より

2018年8月19日

内を見て 外を見る

TURNとつながったときの言葉

イメージする力

アーティストは、イメージする力が出るスイッチを押すコツがわかっている人たち。整体師がツボを押すように、施設の利用者さんや職員さんの「あなたもアーティストになれる」というツボをキュキュって押していく。

そんなアーティストが入っていくと、ものを作り出す力が生まれてきて、ああしよう、こうしようと考えているうちに、3分先の自分をイメージしながら手を動かせるようになる。そうすると、止まっていた時間が動き出し、昨日の私と今日の私と、明日の私は確実に違っていくんだなとイメージできるようになる。明日がイメージできることで生きる力が湧いてくる。

—

日比野克彦（TURN監修者）

TURNフェス4「オープニングトーク」より

2018年8月17日

学校、塾、家庭みたいに役割がかなりタイトに決められている。国語、算数、理科、社会みたいな教科もすごく強い目的が設定されて、小さいときから分野が分かれている。

だけど、人間ってやっぱりひとつのホールというか、全体だと思うんですよ。音楽は音だけの問題じゃないじゃない。人間の経験としては、聴覚だけではなくて心にも響いてくるし、いろんなことに影響してくると思う。一人の人間を学校の教科で分断するとか、大人の役割で分断するとかじゃなくて、やっぱりひとつの全体としてとらえて、出会っていくというプログラムにしたい。

—

宮下美穂（NPO法人アートフルアクション事務局長）

TURNフェス4「街を生きる～教育現場での実践を通して地域に投げかけること～」より

2018年8月18日

ひとつの全体

ことばを使わずに手の動きだけでコミュニケーションをとろうとする《手の会話》というワークのときに、たまたまとなりにいた、ひばりグループのHさんが大西さんの頭をつかみはじめました。それを受け入れつつ、Hさんに頭の具合を味わってもらいながらワークも続ける大西さんですが、となりの職員さんたちがHさんの肩に触れたり頭に触れたりして、別のところに注意を向けようともしていました。

1対1のワーク《手の会話》をしているふたりからまるように《手のわりこみ》があって、《手のSTOP》があって、さらに背後から《手のわりこみ》がまたあって、結局5人くらいのワークになっていました。

その様子はなんとなく可笑しいのと同時に、それを見る側にとっても、1対1の《手の会話》にフォーカスしていた視線が、5人の《手の雑談》に拡張してゆく感じが共有できていた気がします。

—

宮田篤（美術家）

タイムライン「手の雑談」より

2018年2月21日

（TURNフェス4の会場に）何も知らずに入ってきて戸惑っていると同時に…、外国の方がいらっしたり、障害の方の作品があったり…全部同じように…なんか、自分がとても不思議な感じです。なんだか知らないけど両手を広げて感じているって、そんな感じ…です。

—

TURNフェス4来場者

佐藤悠のブースで行われた対話より

2018年8月19日

そのままであり続けるかもしれないものが、何かしら変化していく。(主催側は)何かしらの「よい部分」の評価軸は必要なんだろうけれど、何ををもってよしとするのか。

「変化」自体をよしとして、それがいい方向に向かっているのか、悪い方向に向かっているのか、極論を言えば、そもそも判断はできないんじゃないか。

「変化」というものに対する価値…それがTURNの本質なんだろうなあ。

—

五十嵐靖晃 (アーティスト)

TURNフェス4 アーティストトークより

2018年8月18日

苗木の採取を日課にしていた方が入院中、病院周辺の山に無断で入って苗木を取ってきて…。でも病院には鉢がないから、ゴミ箱からカップラーメンの空の容器を取って植え替えたりする。ただ、これらの行為は病院の常識や看護師からすると問題行動になってしまうわけです。(現代美術家の)上原耕生は「これをアート作品にしませんか」と提案しました。このことが、「誰にとっての日常なのか、誰にとっての常識なのか」ということを問うきっかけとなったのです。

—

渡邊慶子 (袋田病院作業療法士)

TURNフェス4

「精神科病院によるアートの取り組み」より

2018年8月19日

がま君とかえる君が作ったものは「手紙」ではないんです。「期待する時間」を作ったということが一番重要だと思うんです。手紙がこないことに絶望していたがま君は、かえる君が手紙を書くことによって、「手紙が来るのを待つ」時間が絶望の時間から希望の時間に変異した。それは(手紙を)「作る」という行為が(時間を)変容させたわけです。

二匹が玄関の前に腰を下ろして4日間待つわけですけど「とても幸せな気持ちでそこに座っていました」というこのワンフレーズがすごく重要。僕たちは、ものを作るときにできてしまったものに目が行きがちなんだけど、実はその行為そのものとか、作っている時間の質そのものがいかに希望に満ちているか、そして楽しいかっていう、時間の質を変えることが一番重要なんじゃないかなと思ったんです。

—

藤浩志 (アーティスト)

第6回TURNミーティングより

2018年10月27日

自由な空間で自由に表現できるTURNの場を見て、社会には、気づかないところで「当たり前」とか「規律」が重々しく存在するのだなと思った。

—

TURNフェス4サポーター

備忘録より

2018年8月19日

僕も舞台とか作っていて、本番って一見すごく洗練されている部分をつなぐことが多い。だけど、実は作るプロセスに莫大な時間がかかっていて、そっちの方がいろいろな出来事が起きている。その中で日々思ったことが生まれては消え生まれては消え、「それ、面白いなあ」と思う瞬間はいっぱいある。けど、書いてまとめる力がない。TURN NOTEを見ると、そういうプロセスがまとめられていていいなあと思った。

—

近藤良平（振付家／ダンサー／「コンドルズ」主宰）
第5回TURNミーティングより
2018年5月13日

「La moindre des choses（すべての些細な事柄）」というニコラ・フィリベールの映画のタイトルが物語っているように、ちょっとしたことや、人が気づかないようなことを常に拾い上げて「みなで分かちあっていく」ことがひとつの場を創るっていうことを通っていたウリ院長もよく言っていました。

—

田村尚子（写真家）
TURNフェス4アーティストトークより
2018年8月18日

今、2020年の東京オリンピックの影響で、アール・ブリュット、アウトサイダーアート、障害者のアートが取り上げられることが増えています。これらは、アーティストや美術批評側、あるいは福祉側の視点で今まで語られてきましたが、当事者と長く暮らしてきた家族がどのような影響を受けてきたか、家族にどのような変化があったのか、作品と本人、そして本人を取り巻く家族の関係性に着目した研究は十分にされていません。なので、私は障害のある作家のいろいろな家族にインタビューをしようと思っています。

—

高橋梨佳（大学院生）

TURNフェス4「妹のわりきれなさツアー」*より

2018年8月19日

*自閉症の姉を持つ大学院生・高橋梨佳とともに、会場にいる人にインタビューをしながら、参加者同士で対話を楽しむツアー。

いい出会い方

TURNとつながったときの言葉

知的な障害のある方、発達障害がある方は、目に見えてわかるわけではなく、一人ずつが全然違う状況にある。その状況を言葉で説明できるかというよりは、いい出会い方をして、どういう時間を過ごしたかということが、その子をわかる環境になっていく。そうした環境がないと、周りの人が何か手伝いたいと思ったとしても、近づきにくさというものがある…。交わることで、そうした状況への理解を提供できればいいなと思っています。

—

松本知子（社会福祉士／言語聴覚士）

TURNフェス4「異質なものの同士の出会い～アーティストと療育現場の相性～」より

2018年8月17日

福祉の現場に、アーティストが来たときに失敗するじゃないですか、いろいろなこと。全てがうまく行くわけじゃないし、何やっているかわからない、何になるんだ、ということにアーティストが真剣になっている。そうした姿を、福祉にもつなげていきたいと思っている。

そうしたアーティストの姿を見ることで、もっと挑戦できることがあるんじゃないかと。確かに失敗はしたくないけれど、失敗してもそこまで悪くないんじゃないか。そういう、イノベティブな風土が福祉の業界やスタッフの中に入ってくるといいなと思っている。

—

鈴木一郎太（大と小とレフ取締役）

第4回TURNミーティングより

2018年1月28日

きょうの仮説

TURNとつながったときの言葉

その場その場で起こる本当にちょっとした心の動きや気になったことというのは、あっというまに忘れてしまうなあと思います。それは《きらり》という光の輝きにちかいものかもしれません。また、《ぐっと》したことは誰かに伝えようとするときにはじめて輪郭をもって形作られるのかもしれません。

—

宮田篤（アーティスト）

タイムライン「きょうの仮説」より

2018年2月7日

柵がなくなる

全ての文化施設から柵がなくなって、人が行き来できる。日本中の施設からも出入り口の柵がなくなって、いろいろな人が出入りできる。そのつなぎ役としてアーティストがいる。それぞれの価値観を、その人の魅力で発信していくのが、アートの特性。そういった特性を持つアーティストによって、特色のあるコミュニティがつながることが、きっと次の新しい社会の基盤になっていくのだと思うし、TURNをそうしたもののきっかけにしていきたい。

—

日比野克彦 (TURN 監修者)

第4回TURNミーティングより

2018年1月28日

いいコミュニティ

例えば、「今度保育園ができます。でも地域住民からのクレームでなかなかうまくいかないです」という課題があったとする。「それはけしからん。地域住民のエゴだ」ってなるじゃないですか。でもひょっとしたら、僕が日ごろ接している人の中には、「保育所嫌だな」と思っている側の人もあるかもしれない。部屋の中で窓を目張りしてカーテン閉めて、なんとか気持ちを安定させている中で、外で子供の声がすると驚いて、辛くなって我慢できなくなって、「保育所やめてくれ」と何度も電話してしまう、とかね。だから、コミュニティからあんまり好かれていないんじゃないか。

(中略)

ひょっとしたらコミュニティにとって困った人かもしれない人たちを、僕は主人公にしたい。

—

新澤克憲 (ハーモニー* 施設長)

TURNフェス4「精神保健福祉士とコミュニティデザイナーに聞く『コミュニティと福祉とアートプロジェクト』」より

2018年8月19日

*ハーモニー：東京都世田谷区にある、特定非営利活動法人やっこが運営する定員20名の就労継続支援B型事業所。

（自閉症の姉が作る、ビニールテープで巻きつけた人形を例に出しながら）ずっと家族ではこれをやめさせようという方向しか考えてなかったので、これがアートかって言われるとまだよくわからないです。けど、問題だからやめさせようとしていたところから、ちょっといいなって思うように変わりました。やめさせようと一心に思っていたのがほぐれて、肯定的に思えた変化がありました。

—

高橋梨佳（大学院生）

TURNフェス4「妹のわりきれなさツアー」より

2018年8月19日

TURNとつながったときの言葉

のきみゆ

子供たちは、「障害がある」ということで、「障害＝劣っている」と世間では評価されておりますが、関心が持てるもの、自分が好きなものなどに出会ったときには、真剣に集中して続けることができ、健常児に劣っているばかりではありません。となると、適切なものを準備してやれない大人たちの力が今ひとつであるという見方もできます。子供たちの進路について、改めて考えさせられています。

—

濱崎久美子（金町学園施設長）

メールより

2018年8月26日

TURNとつながったときの言葉

ちいさい

豊かに混ざっていく。その混ざり方を考えていくときに、障害者とか健常者とかいう大きな言葉でくる区別ではなくて、豊かな生活あるいは豊かな時間を持つときの所作としての、ふるまい方のひとつが実はTURNの先にはあるのではないか。大きな大きな仮説の中でのTURN LANDという場所での試みに希望が見える。

—

森 司 (TURNプロジェクトディレクター)

TURN フェス4

「精神科病院によるアートの取り組み」より

2018年8月19日

TURNとつながったときの言葉

ふるまい方

TURNとつながったときの言葉

誰が喜んでいんだろう

TURNにアーティストとして関わって、アーティストの目的と施設の目的の違いがある中で、すごくジレンマというか、葛藤があった。こちらが本気で作品を作ろうとすればするほど、負荷がかかるのは施設のスタッフや利用者。これは元も子もない話。大変そうだし、みんなに迷惑をかけるのは嫌だから無理には追いこまないでおこうと想着いて。でも、意外に利用者は乗ってきちゃったりする。福祉施設の本丸の仕事ができないくらいアーティストと利用者が乗ってきちゃったときに「誰が喜んでいんだろう」というジレンマがあった。

—

山城大督 (美術家/映像作家)

第4回TURNミーティングより

2018年1月28日

障害のある人が、美術の方に来たっていうことで
すね。僕らが行ったのではなくて、来てもらうこと
ができた。(本人の)意志をもって。

そういう環境がどこかでできないかっていうこと
ですね。今、制作するところがないので、今後そう
いう場ができたら彼女(フェスに参加していた岡本智
美さん。自閉症を持つ)にとって理想的かな。きっと
場を共にして制作するアーティストにも何かが起こ
るような環境になると思う。

ただ、なんというか、自然現象のように作品を作るの
で、彼女が。それは、意志とかじゃなくて。

—

伊勢克也(アーティスト)

TURNフェス4「TURNさんぽ」より

2018年8月19日

「高齢」「障害」という分野はいずれみんな通る
道ですよ、加齢とともに。複数の障害を経験
することにもなるだろうし。それを、さも自分とは
関係ない世界のように扱う人ばかりが住んで
いる地域というのは、障害者施設にとって悪いか
どうかは関係なく、そこに住んでいる人たちにとっ
て不幸です。

自分たちがいずれ経験するであろう、あるいは自
分たちの先人たちが今経験しているであろうこと
にまったく無関心な人たちがばかりが住んでい
るというのは、不幸な状態だなと。地域と福祉、
介護がどうつながっていくかというのは、賛否あ
るにせよ、考えねばならんことだと思います。

—

山崎亮

(studio-L代表/コミュニティデザイナー/社会福祉士)

TURNフェス4「精神保健福祉士とコミュニティデザイナー
に聞く『コミュニティと福祉とアートプロジェクト』」より

2018年8月19日

スタッフの中に、食べるのが苦手な子がいたりする
んですよ、結構な確率で。いわゆる摂食障害。食
べれるんだけど、すぐ吐いちゃう人とかがいたんです。
僕は食べ物って「楽しいでしょ」とか「美味しいでしょ」
という作品をずっと作っていたんですが、なんかそう
いう人たちにとって敵みたいな存在だなあと思って。
相容れない何かがある気がして、その辺から興味を
持ち出して、摂食障害についてちょっといろいろ調
べたりしました。

—

EAT&ART TARO（アーティスト）

リサーチプログラム報告会より

2018年3月5日

相容れない何か

アーティストの福祉に対する壁は低いのに、なんで
私たちから見るアートってこんなにも壁が高くて、
乗り越えにくいと感じるのかな。

（中略）

職場の子供たちと美術館などと一緒に出かけても
ようと考えても、一歩引いてしまう自分もいて。職場
に帰ったときに伝えられる術も持っていないので、
スタッフ間の意識や知識に差が出ると思ってしま
うからなのかな。

—

藤井由加子（児童福祉施設職員）

TURNサポーター勉強会より

2018年5月23日

美術館であるのを忘れてくるんですよ、だんだん…。
ずっと往来がある所で止まっていられるって、なかなかないから。

—

鈴木一郎太（大と小とレフ取締役）

TURNフェス4「支援と表現のはざま」より

2018年8月18日

止まっていられる

TURNとつながったときの言葉

数時間に及ぶインタビューの仕事が終わった後の
和んだ場で、上田假奈代さん（ココルーム*代表）と
雑談をしているときだった。西成・釜ヶ崎で起き
る、ありがちだけでも「ちょっと迷惑な」感じの出来
事について彼女が口にした。

「警察に対応してもらうけど、告訴はしないわ。次
の日も同じようなことになったら、また警察に來
てもらえばいいの。だから告訴はしない。だって、
迷惑かける人は、(実は)本人が一番困っている人な
のだから」

当たり前のこととして話す姿に、彼女の心情とい
うか、コアにある感覚を見た気がして、強く記憶
に刻んだ。その日以来、困った状況に出くわす度
に、この言葉を思い返す。

—

森 司（TURNプロジェクトディレクター）

TURN運営本部ミーティングより

2018年10月上旬

*ココルーム：大阪市西成・釜ヶ崎に根ざし、人々との出会い、表現と
学びあいを生み出す喫茶店、ゲストハウス。

あの空間にいない自分だったら、例えばそういう
(自分の会話の仕方では伝わらない)人に道を聞かれた
り困ったことに会ったり…ともかく行きがかりで
出会ったら、手話ができればよかったなとか、何か
言葉がしゃべれたらよかったのになんて思ったけ
れども…そんなことを思ったってしょうがない。
今そこで自分の持っているものっていうか、自分
がここでこの人たちとなんとか関わるしかない。
その感覚は、普段自分にあまりない感覚だった
なあっていうのが、とっても印象的。

—

和島千佳子 (TURNフェス4サポーター)

TURNサポーター勉強会より

2018年5月23日

私は、TURNのイベントのなかで、伊勢先生や日比
野先生、また、スタッフの皆さんの智美に対する姿
勢というか立ち位置が、母親である私とは違うこ
とに、気づかされました。智美の人格を認めてく
ださい、障害がある無しに関わらず、普通に会話
してくださいました。日比野先生が、「どこに運ぶ
の?」と智美に尋ねているのをみて、「なにを?」で
はなく「どこへ?」を尋ねるのは、私はおもいもよ
らず、感動しました。智美の考えや気持ちを聞き
出すのも、上手でした。智美が女子美時代に、伊
勢先生はじめ、彫塑研究室の先生方に、穏やか
な表情で、会話していたのも、皆さんの立ち位置
だったように思います。女子美卒業後は、しばらく
そういう環境には恵まれませんでした。TURNに
参加して、しばらくぶりに、智美にとって素晴ら
しい環境でした。

—

岡本貴子 (岡本智美の母)

メールより

2018年11月27日

著者プロフィール

朝倉景樹

シュール大学スタッフ | シュール大学は2015年度からTURNに参加。長年、引きこもり・不登校など、生きづらさを抱える若者の学びの活動支援を行っている。

五十嵐靖晃

アーティスト | 1978年千葉県生まれ。東京藝術大学大学院修士課程修了。人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。

イシワタマリ

美術家/山山アートセンター代表 | 1983年神奈川県横浜市生まれ、京都府福知山市在住。慶應義塾大学で社会学を、セツモードセミナーで絵画を学んだのち、2008年Bilbao Arte基金の助成を受けて1年間、スペイン北部バスクにレジデンス滞在。京都府北部広域を拠点に「山山アートセンター」構想を展開中。

伊勢克也

アーティスト | 1960年岩手県盛岡市生まれ。1986年東京藝術大学大学院美術研究科修了。自然/人工物/メディア空間等さまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形作る形態をテーマに作品を制作し、さまざまなワークショップを行っている。現在、女子美術大学短期大学部教授デザインコースメディア担当。

EAT & ART TARO

アーティスト | 調理師学校卒業後、飲食店勤務を経てギャラリーや美術館などでケータリン

グや食のワークショップ、カフェプロデュースなどを行っている。

海老原周子

一般社団法人kuriya代表/通訳 | ペルー、イギリス、日本で多様な文化に囲まれて育つ。慶應義塾大学卒業後、(独)国際交流基金や国連機関で勤務。2009年に移民の子どもの対象としたアートプロジェクトを立ち上げ、多文化なコミュニティづくりや人材育成を行う。

大西健太郎

アーティスト/ダンサー | 1985年生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了後、東京・谷中界隈を活動拠点とする。その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「ここがおどる」ことを求めつづけるパフォーマー。「風」をテーマにダンス・パフォーマンス作品の公演を行う。

小野龍一

音楽家 | 東京藝術大学の作曲科にて現代音楽の作曲と音楽史および音楽美学を学ぶ。現在は音楽作品の制作を主体に展示や舞台演出などの様々なジャンルを横断しながら聴取論の実践的な研究を行っている。

岡本貴子

2005年、アーティストの伊勢克也が教鞭をとる女子美術大学短期大学部に入学した、自閉症の岡本智美さんの母親。

久保田翠

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長 | 2015年度はアーティストの中崎透とともにTURNフェスに参加し、2016年度は

TURNセンター構想会議に出席した。

近藤良平

振付家/ダンサー/「コンドルズ」主宰 | 男性のみ、学ラン姿でダンス、映像、コントなどを展開するダンスカンパニー「コンドルズ」を主宰。現在、NHKエデュケーショナルと共に0歳児からの子ども向け観客参加型公演「コンドルズの遊育計画」や埼玉県と組んで行う「近藤良平と障害者によるダンス公演」ハンドルズ公演など、多様なアプローチでコンテンポラリーダンスの社会貢献に取り組んでいる。

佐藤悠

アーティスト | 1985年三重県生まれ。「伝える」ことをテーマに、発話、対話を伴う表現を行っている。近年は鑑賞行為に興味を持ち、複数の美術館で独自の鑑賞プログラムの実践を行っている。

新澤克憲

ハーモニー施設長 | 統合失調症など、心の病を持ちながら暮らしている人が思い思いに過ごせる施設として「ハーモニー」を運営。

鈴木一郎太

大と小とレフ取締役 | 静岡県浜松市生まれ。イギリスで10年ほどアーティストとして活動後、認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの初期に、深澤孝史と起草した「たけし文化センター」事業の様々な分野と連携した企画を主に担当。静岡県文化プログラム・コーディネーター。NPO法人こえとことばとこころの部屋理事。

高橋梨佳 大学院生 会場にいる人たちと、自閉症の姉を持つ家族の一員ならではの思い出を共有しながら、とりとめのない対話を楽しむ「妹のわりきれなさツアー」をTURNフェス4で実施。	期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用したデモンストレーション型の美術表現により「対話と地域実験」を実践。		大学大学院および東京大学大学院修了。博士(工学)。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。	シル東京事業推進室事業調整課長 ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業「Tokyo Art Research Lab」、「東京都による芸術文化を活用する被災地支援事業 (Art Support Tohoku-Tokyo)」等を手がける。
田中真理子 TURNサポーター TURNフェス4にサポーターとして参加。大学職員。	藤井由加子 TURN運営本部スタッフ 愛知県の放課後等デイサービス事業所で働いている。東京藝術大学履修証明プログラム「Diversity on the Arts Project (DOOR)」2期生。		山城大督 アーティスト 1983年大阪府生まれ。名古屋市在住。映像の時間概念を空間やプロジェクトへ応用し、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開する。京都造形芸術大学アートプロデュース学科講師。	
田村尚子 写真家 徳島県生まれ、時間をかけ対象と向かい合う撮影を続け、京都を拠点に写真を中心に国内外で作品発表をする。抽象的なカラー作品の他にポートレート、写真集にシリーズケアをひらく『ソローニユの森』(医学書院)ほか。仏映画製作や音楽家などとの多数のアーティストコラボレーションなどがある。アート&フィルム＝ヴェッター公園の代表としても活動している。	松本知子 浜松市根洗学園園長 根洗学園は就学前の子供の療育を行っている。社会福祉士・言語聴覚士の資格を持つ。		和島千佳子 TURNフェス4サポーター TURNフェス4にサポーターとして参加。幼稚園教諭。	
濱崎久美子 金町学園施設長 「福祉型障害児入所施設」の金町学園施設長として、聴覚障害児の支援を行う。	宮下美穂 NPO法人アートフル・アクション事務局長 2011年から東京都小金井市が推進する小金井市芸術文化振興計画推進事業「小金井アートフル・アクション!」の事業運営に携わる。		渡邊慶子 作業療法士 1980年、栃木県生まれ。2002年、国際医療福祉大学作業療法学科卒業、2005年より医療法人直志会勤務。学生時代に就労支援関連のNPO法人立ち上げに参加し運営に携わる。2009年より現在のデイケア(アトリエホロス)に所属。	
藤浩志 美術家/秋田公立美術大学副学長・教授 1960年鹿兒島県生まれ。京都市立芸術大学在学中、演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志し、各地の現場でプロジェクト型の表現を模索。同大学院修了後、パプアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初的表現と社会学に出会い、バブル崩壊	宮田篤 アーティスト 1984年愛知県生まれ、東京都在住。2009年愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻修了。おとなも子どもあそべるぶんがく「微分帖」など、ワークショップやドローイングによって他者との関わりの中にある差異を見つめることを制作の契機にしている。 山崎亮 studio-L代表/コミュニティデザイナー/社会福祉士 1973年愛知県生まれ。大阪府立		日比野克彦 TURN監修者/アーティスト 1958年岐阜県生まれ。2015年より東京で始動した「TURN」の監修を務める。東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授、岐阜県美術館館長、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長。 森 司 TURNプロジェクトディレクター/アーツカウン	

TURN NOTE

「TURN」とつながったときの言葉 2018

—

—

平成31年3月13日

—

監修：森 司（アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター）

編集：長瀬光弘、奥山理子（アーツカウンシル東京 TURNコーディネーター）

編集協力：アーツカウンシル東京〔浅野五月、畑まりあ〕

特定非営利活動法人 Art's Embrace 〔天羽絵莉子、岩中可南子、田村悠貴、

東濃匠十、東濃誠、藤井由加子、本島かおり、山口麻里菜〕

デザイン：阿部原己

翻訳：オフィス宮崎

印刷：山田写真製版所

—

発行：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階

Tel：03-6256-8435 / Fax：03-6256-8829

Email：info@turn-project.com

URL：www.artscouncil-tokyo.jp

—

TURN公式ウェブサイト：http://turn-project.com

—

—

—

—

©2019 Arts Council Tokyo

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

All rights reserved